

令和5年度自己評価シート(中間評価)

| | | | | | | | |
|----|------------|-----|----------------|------|------|-------|-----|
| 校番 | 202 127 | 学校名 | 広島叡智学園中学校・高等学校 | 校長氏名 | 福嶋一彦 | 全・定・通 | 本・分 |
|----|------------|-----|----------------|------|------|-------|-----|

1 (1) 国際バカロレア教育 (IB プログラム) を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校の教育目標の達成を目指す。

| | |
|---|-------------|
| 【短期(本年度)経営目標】 IB プログラムを導入した本校のアイデンティティが具現化した姿を、生徒、保護者、教職員それぞれが、交流等を通して自らの言葉で表現するとともに、自らが関与した行動や活動について、その目的や内容を説明することができる。 | |
| 【本年度行動計画】 ・教職員研修を実施し、本校のアイデンティティが具現化した姿を共有する。 ・留学生の保護者も意識した情報発信を行い、本校の目指す姿と教育活動の関係性を示す。 ・留学生を含めた生徒全員が、活動の目的と本校の目指す姿の関係性を振り返る活動を意識的に取り入れる。 | 評価 A |

| | |
|---|-------------|
| 【短期(本年度)経営目標】 日本の学習指導要領とIBプログラムを融合させた指導と学習の充実を図るために、学校の示す方向性を基に、IB推進チームと教科会の間で適切なコミュニケーションを行うなどとして、校内組織の活性化が図られている。 | |
| 【本年度行動計画】 ・MYP チーム会議、DP チーム会議の定期的な実施と各教科会への効果的な接続を行う。 ・MYP チーム会議、DP チーム会議において、教科横断的な実践共有を行う。 ・各教科会を定期的かつ効果的に実施する。 | 評価 A |

| | |
|--|-------------|
| 【短期(本年度)経営目標】 校外の様々な人的・物的資源を活用したプログラムの実施により、IB プログラムの充実が図られている。 | |
| 【本年度行動計画】 ・島内企業におけるインターンシップの実施や島のニーズを捉えたSAを実施する。 ・各教科における校外の資源を活用したカリキュラムの充実と改善を図る。(他校連携を含む。) | 評価 B |

1 (2) 中間評価のまとめ

| | |
|-----------------------|--|
| 評価結果の分析 | <ul style="list-style-type: none"> ・MYP チーム及びDP チームがそれぞれのプログラムの充実に向け、国際バカロレア指導のアプローチ(ATT)を軸とした授業改善に取り組んでいる。 ・MYP から DP への効果的な接続のため、中3対象の DP 模試実施後のフィードバックの際に、DP 科目選択(レベル選択を含む)に向けた助言を丁寧に行なった。また、DP の授業見学も中学生に良い刺激を与えることに繋がっていると考える。 ・島内企業におけるインターンシップのみならず、EE(課題論文)において島内企業の協力をいけなかったながら研究を進めたり、経済産業省主催のカーボンサイクル産学官国際会議や駐日英国大使館からのオファーでサイバープロジェクトへの参加機会を得るなど、校外の様々な人的資源を活用できている。 ・高等学校段階では、IBDP を用いた進路実現に向けて、国内外の大学訪問を計画・実施している。 ・IBDP 取得に向けて進路指導部を軸としながら教科担当による定期的な面談を進めるよう計画している。 |
| 今後の改善方針 | <ul style="list-style-type: none"> ・校内での研究授業や IB 教員研修を通して、IB のフレームワークを全教員が理解し、それぞれの教科学習に生かせるよう引き続き IB チームと各教科の連携を強め教員同士の協働的な学びを促進する。 ・引き続き、校外の様々な人的・物的資源の活用を進める。 ・進路指導においてはIBDP を真正に評価している大学との連携を密に図り、生徒がIBDP を用いて進路を実現することができるように支援するとともに、留学生の保護者も含め、丁寧に情報を発信していく。 ・生徒が自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、IBDP 取得に向けた学習に見通しを持って粘り強く取り組むことができる環境を整備する。 |
| 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方針 | <ul style="list-style-type: none"> ・IBDP では、大学の教養課程で扱う内容も含んでおり、教員は「大学のリベラルアーツを指導している」という意識をもって、生徒の探究的な学びを進める必要がある。 ・IB の最大の特色は「自分を知る」ことであり、生徒が「自分とは何か」「自分の探究したい研究領域は何か」を常に問い続け、探究していく姿勢をもたせるような進路指導を進めていく。 |

2 (1) 教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する。

| | |
|--|---------|
| 【短期(本年度)経営目標】 授業での学習活動に、見通しを持って粘り強く取り組み、その学習をまとめ、振り返って次につなげたり、仲間や地域の方々との対話や協働を通じて考えを広げたり深めたりすることができる生徒を育成する。 | |
| 【本年度行動計画】 ・ATLスキルを用いて、各学年で目指す姿を、生徒及び教職員で共有する。 ・授業などの教育活動において、ATLスキルが発揮され、伸長できる指導と学習を実践する。 ・ATLスキルの伸長に関する評価を定期的に行い、必要に応じて焦点化した指導を実践する。 | 評価 B |

| | |
|--|---------|
| 【短期(本年度)経営目標】 正解が存在しない実社会の問いに生徒が向き合い、その課題解決に向けて収集・精査した情報を基に、授業で身に付けた知識・技能を活用して、自らの考えを形成し他者に表現できる、MYPの4年間を見通したプログラムを開発し、それを実践・検証する。 | |
| 【本年度行動計画】 ・ルーブリックを用いて、各教科の教科横断的な資質・能力を高める指導計画の充実を図る。 ・MYP及び未来創造科の集大成となるパーソナルプロジェクトの実践を通して、MYP段階で育成する課題発見・解決能力を明確化するとともに、その実践を振り返り、未来創造科のカリキュラムの改善に活かす。 | 評価 B |

| | |
|--|---------|
| 【短期(本年度)経営目標】 教員一人一人が「教科横断的で探究的な授業づくり」を行うために必要な研修プログラムの開発を推進するとともに効果的な指導方法や教材開発の共有を図る。 | |
| 【本年度行動計画】 ・恒常的な授業交流を行うことができる教員研修計画に基づき、それぞれの教員が、自らを高めるための研究・研修に積極的に取り組み、自己変革できる教員集団を目指す。 ・IB教育に初めて従事する着任者に対して、各教科主任とIB推進チームが協力して、単元づくり等において周囲からのサポートやフィードバックを得やすい環境や機会を提供する。 | 評価 A |

2 (2) 中間評価のまとめ

| | |
|-----------------------|--|
| 評価結果の分析 | <ul style="list-style-type: none"> ・パーソナルプロジェクトの指導と評価を通して、生徒だけでなく教員もATLスキルを特定したり応用したりしながらプロジェクトを完遂させる重要性を理解している。 ・しかしながら、教科で学んだATLスキルをどのように自身のプロジェクトに応用していくかについて、踏み込んだ研究ができていないことが、生徒のレポートにも見られている。 ・DPコア科目であるTOK(知の理論 Theory of Knowledge)については、TOK展示に向けた準備を現在進めている。TOKエッセイへ繋ぐ指導方法の検討を継続中である。 |
| 今後の改善方策 | <ul style="list-style-type: none"> ・1月からはDPが2学年で展開され、IB校としての真価が試される。MYPとDPの学びのつながりを感じさせる教科での指導を引き続き行っていく。 ・TOKについても、1期生のTOKエッセイ指導体制を整えるとともに、2期生のTOKがよりバージョンアップするよう指導体制づくりを進める。 ・教科横断型の学際的な単元(IDU)については、より魅力的な単元開発を目指し、次年度は教科の組み合わせを変え実施する計画である。 ・PP、EE、TOKエッセイへの取組をそれぞれで完結してしまうのではなく、生徒自身がMYPとDPの接続や繋がりを見出し、より奥深い探究へと立ち向かうことができるよう、支援していく。 |
| 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会で「地域ができることはたくさんあるので頼ってほしい」と言っていた。「大崎上島学」を系統立てて扱うことの検討も含め、生徒が各科目やPP等で自身の探究を深めていけるよう、地域と連携を進めながら、本校がValueとして掲げている「グローバルな視野」と「地域に根ざした心」の双方を育てていく。 |

3 (1) 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める。

| | |
|--|----|
| 【短期(本年度)経営目標】 集団への所属感や連帯感を深め、集団の構成者であることを自覚し、人と人との触れ合いやつながりを深めていくことができるようにする。 | |
| 【本年度行動計画】 ・生徒会活動と寮での係活動とを関連付け、一人一人がリーダーとフォロワーの両面を経験し、様々な役割に対して、責任感を持って取り組み、集団生活の安定に向けて貢献できるようにする。 ・自発的に集団生活におけるルールやマナーを守り、個の役割を責任持って実践できる寮の組織づくりを行う。 | 評価 |
| | B |

| | |
|--|----|
| 【短期(本年度)経営目標】 生徒一人一人が、寮生活におけるきまりを厳守し、主体的に規律ある生活を通して、安心して充実した寮生活を送れていると感じることができるようにする。 | |
| 【本年度行動計画】 ・寮則の意味や目的を考えさせ、何のために守らなければならないのかを理解し実践できるような機会を創出し、評価場面を設定する。 ・異年齢集団での交流や寮スタッフとのコミュニケーションの充実を図るための機会を通して、協働することや、他者の役に立ったり貢献したりすることの喜びを得られる活動を充実させる。 | 評価 |
| | B |

| | |
|---|----|
| 【短期(本年度)経営目標】 生徒一人一人が、自己の健全な生活を実現するために、食に関する意識を高め、望ましい食習慣を身に付けさせている。 | |
| 【本年度行動計画】 ・日々の食事指導及び食に関する指導を行い、食事のマナーや望ましい栄養などの食生活に関する正しい知識を習得させる。 ・地場産物を活用した郷土料理の提供を通して、食事に興味・関心をもたせる。 | 評価 |
| | B |

3 (2) 中間評価のまとめ

| | |
|-----------------------|--|
| 評価結果の分析 | <ul style="list-style-type: none"> ・寮の係活動や行事を通して、87%の生徒が自覚を持った寮生活の改善に貢献し、また、95%の生徒が集団生活におけるルールやマナーの目的を理解して実践することができていると認識している。 ・一方で、これらのことを他者へ積極的に働きかけていくことができる力は 35%程度と、リーダー性の育成に関してはやや課題の残る結果となっている。また、異学年、異校種の仲間との交流機会をより多く望む声もでている。 ・日々の各クラスでの給食指導、食に関する指導、給食委員会の活動等により、食事マナーの定着は図れている。また、献立に郷土料理や諸外国の料理を取り入れ、掲示物等を通して食に関する情報発信することにより、食文化への興味・関心度が高まっている。 |
| 今後の改善方策 | <ul style="list-style-type: none"> ・リーダーに更なる自覚と責任感を持たせるため、係活動を精選・整理する。 ・異校種での交流機会や生活の中での学びを充実することを旨とし、中高一貫教育校の係活動の在り方を創造していく。 ・残食の多さや、献立や食に関わる人々に対する興味・関心の低さが主な課題である。そのため、引き続き生徒への食事時間の声かけ等の支援・指導を行うだけでなく、食事を通して生徒と調理スタッフがコミュニケーションを図る機会を作る。それにより、食への感謝の気持ちの表れとして、残さず食べたり、自然の恵みや作り手の思いを大切にしようとする態度を育む。 ・また、献立内容の工夫や改善についての検討や、生徒自身の「運動・睡眠・食事」のバランスの取れた生活習慣の向上の支援を推進していく。 |
| 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策 | <ul style="list-style-type: none"> ・本年度初めて、寮のユニット替えを、保護者の協力を得て行った。今年で2年目となる保護者対象学校公開日の開催も好評である。このような形で、とりわけ寮生活に関わることは、学校で抱え込むのではなく、保護者や地域に協力を仰ぎ、子どもたちを学校・保護者・食堂等の業者・地域で協力して支える体制をつくっていく。 |

4 (1) 働き方改革に関する短期（本年度）目標

| | |
|--|----|
| 1 短期(本年度)経営目標 【短期(本年度)経営目標】 教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。 | |
| 【本年度行動計画】 子供と向き合う時間の定義について、全体研修等で理解を深め、この時間の確保のために必要な方策を検討し、実践する。 | 評価 |
| | B |

| | |
|--|----|
| 【短期(本年度)経営目標】 教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を縮減している。 | |
| 【本年度行動計画】 本校において設定した入退校時刻を意識した業務遂行ができるよう各分掌や学年で検討し、好事例を全体で共有する。 | 評価 |
| | B |

| | |
|---|----|
| 【短期(本年度)経営目標】 教職員に対して、全体・学年・分掌において、形態を工夫しながら、働き方改革に関する研修を実施している。 | |
| 【本年度行動計画】 働き方改革取組方針等について、全体研修等で十分理解を深めるとともに、自らの取組状況を振り返り、課題や対策を見出す機会を設定する。 | 評価 |
| | B |

4 (2) 中間評価のまとめ

| | |
|-----------------------|---|
| 評価結果の分析 | <ul style="list-style-type: none"> ・勤務時間について、個々の教職員がタイムマネジメントを意識できるように、月半ばには個人の勤務時間表を提示し、職員朝礼等で確認を呼びかけるようにしたこと、一月当たりの時間外勤務時間が45時間超えの教職員の数が減少している。 ・学校衛生委員会では、在校時間の縮減に向けて意識統一を図るとともに、時間外勤務の実態を「見える化」した。 ・6月に教育職員を対象に全県で1週間の業務内容について一斉調査が実施されたことも、個々の教員が自らの業務内容の精選を考えるきっかけになったと思われる。 |
| 今後の改善方策 | <ul style="list-style-type: none"> ・来年度、高等学校が3学年となり、DP 最終試験及び大学出願等が開始することから、とりわけ本校高等学校の進路指導体制強化のため、これまでの校務分掌・学年分担の見直しを図り、1 月より新体制で業務の遂行ができるよう体制準備を進める。 ・年次有給休暇の計画的な取得や帰宅時間の目標設定等について、日頃からの呼びかけを継続するとともに、分掌や学年内での研修実施時にはタイムリーなフィードバックを行う。 ・完成年度、さらには1期生卒業後の令和7年度に向け、行事検討会議を中心に、中高6年間の行事計画の検討を前倒しで進める中で、行事の精選、時期の見直しを図り、業務の平準化に繋ぐ。 |
| 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策 | <ul style="list-style-type: none"> ・コロナも開け、行事が復活し、かつ新しいことばかりで業務が増えている中、働き方改革に対して一定程度対応できているとの評価を得た。 ・今後、授業の準備や生徒指導・進路指導等に十分な時間を割くために、分掌の教員配置の変更を含め、思い切った運営体制の効率化を図っていく。 ・教員一人当たりの持ちコマ数の整理をする等、IB 校ならではの人員配置の在り方を県教委に提案していく。 |